

「大磯の“明治天皇親漁記念碑”に思うこと」 白井 勲

大磯について何度か書いている。この記念碑についても拙稿80号の「ああ！わが心の大磯海岸」でも書いている。先日又し振りにこの碑の前に行って、この碑を見上げていた。実に立派な書である。力強い行書体で刻されている。長い間僕は明治期の書家日下部鳴鶴のものと思いこんでいた。それはと素人はなれた力強い筆致なのだ。実は揮毫者は金子堅太郎(1853-1942)である。昭和9年(1934)にこの碑は立てられた。晩年の90歳でてる8年前の書である。余けいなことだが彼が亡くなった年に僕が生まれている。

この碑から少し離れた西側の浜に、時の総理大臣、大隈 毅が書いた「松本先生謝恩碑」が大磯海水浴場発祥の恩人松本順医学博士の業績を賛えるものとして建てられている。これが建てられたのは1929年8月である。このわがふる里に、5.15事件で大隈首相は暗殺された。そしてその4年後には2.26事件が起るといふ。時代があわただしく戦争から敗戦へと傾斜して行く時代であった。この二つの碑を見るにつけ、こんなおたやかな美しい大磯海岸でも時代の荒波が越えて行ったことを思わされる。この明治天皇の碑を見ながら、この碑が立てられた由縁をつづぐ思っていた。この事が起ったのは明治元年(1868年)9月20日、明治天皇は東京への行幸に京都を出発された。前年12月29日、孝明天皇が痘瘡により病没されると、また15歳の睦仁親王が新天皇に即位された。時代は慶応から明治となった。明治維新と言われ、すべての事が新しくされて行く時代、実質上の首都は京都から江戸(東京)に遷都された。新政府は、京の人心の混乱を恐れ、天皇が東京へ行くのは行幸(旅行)という形をとった。かつて天皇は神格化され、権力から隠され、権威付与が行われた。そのため天皇の身の周りの世話は、貴族の女官にまかされていた。しかし、新時代の天皇はアメリカの大統領のようなリターナーシップが求められ、ドイツのカイセルのように国の元主であるとされた。そのため天皇の世話や教育係りは、女官ではなく、山岡鉄舟のような文武両道に秀でた男子になった。そのため少年天皇は、形は王制復古のたてまえに則し、伝統的な御簾の神輿に担かれて出発したのである。父の孝明天皇は極端な外国嫌いで、もうその頃かなり行われるようになった痘瘡を拒み受けなかつたので痘瘡にかかり亡られた。(か睦仁少年は密かに蘭方医による痘瘡を受けていたので、父からの感染を受けずにはすんだと言われている。新しい時代が少年帝王に積極的に外界に触れる事を望んでいたとも言えよう。天皇にとって山岡の京から初めて海を見たのは静岡に入っていた。初めて見る太平洋の広さに驚かれた。また絵や文章でしか知らなかった富士山を見たときの感激が大であったと言ふ。

東京の神宮御苑内にある明治天皇の一代期が記念された絵画記念館には、その御幸の時の場面が描かれたものがある。ちょうど秋であったので、稲の収穫のようすを御簾の中からご覧になっている絵がある。庶民が労働している場所を直に見られたと言ふことは大なる体験だったに違いない。そして、10月9日、小田原宿を発ち昼には大磯宿の小島本陣に着き、昼食時間でもあり、東京もま近になったことから、天皇の長い旅路をお慰めしようと、北浜海岸でこの御一行を護衛していた兵卒たちが演習の実演を御覧に入れようと射撃を行った。この場面は、東北大震災を機に日本に帰化されたドイツ人、キーン氏の晩年の大作「明治天皇上」の中にもくわしく描写されている。兵卒たちは大磯海岸(北浜)の沖にある岩、これはカブト岩と云って今も見ることが出来る。当時はかなり沖にあったようだが、最近北浜の砂浜が海流が運ぶ石のため広がり、この岩はすぐ近くにある。僕の少年時代は、かなり泳が出来る者が実力を示すことが出来る距離であったが、その岩の上に居並んでいたカラスに向かって一斉射撃をさせたが一瞬呼吸が合わず、引れてみず逃げてしまった。明治維新を成してげた歴戦の猛者たちも

天覧仕合でみごとホームランを打った長嶋のようにはいかず、背頭を掻いたことであろう。しかし、少年天皇は初めてのことで、とてもお喜びになられたと言う。そのうち角打ち(大砲の射撃)が始められ轟音をどどろかせた。その頃大磯の漁師たちが地引き網を入れ、角打ちが終った頃地引き網を引き上げ始めた。ところが網が海底の岩に引かかってしまい、漁師たちが我も我もと海に飛びこんで網を引き上げた。彼らはこの網に入った魚をたらいに泳がせ、掛竹声も勇ましく裸のまま天皇の御前に抱えて来たのだ。前代未聞のことなので皆びっくりしたが、天皇はこのほかお喜びになった。と記されている。絵画に描れた収穫を御覧になった天皇は神輿の中かであったが、この大磯では、近くの神明神社に、内侍所御羽車(神輿)は安置されていたので、その神社からは歩いて来られたわけで、まったく庶民と裸でお近づきになったわけが得た体験を言えよう。後に、この御羽車は、神明神社に奉安された。今も国道1号線と大磯駅から海へ下る道路とが交差する角の所に、この格の高い神明造りの神社は在る。神社内の碑文には、この事の由来が記されていて、ちなみにこの天皇御幸の費用は77万両(約50億円)と記されている。

「明治天皇親漁記念碑」をなぜ金子堅太郎が書いたのだろうかと考えてみた。これが書かれたのが昭和9年(1934)であった。彼が82歳のときである。金子堅太郎は福岡藩士の子として生れた。東京で学んだ後、アメリカに留学した。ハーバード大学で法学を学び、帰国後は東大の教師をした。後に、伊藤博文に見い出され、彼の秘書官をつとめた。その後伊藤に乞われ、憲法作制にも深くかかわった。伊藤内閣の大臣を何度もつとめた。伊藤直系の官僚であった。日露戦争が始ると、ハーバード大学で学友であったセオドア・ルーズベルト大統領と折衝すること、アメリカ国内の世論を親日本に向けさせる工作任務が与えられた。彼が賢かったのは、日本の近代化や西洋化を強張ることではなく、アメリカ人の心情にうたえ入ることを逞んだことだった。それで彼はルーズベルトに「この本をお読みにすれば日本人が何であるかが分ります」と言い一冊の本を贈った。それは、新渡戸稲造(1862-1933)が英語で著した「武士道」であった。稲造は南部藩士の子(若手集)で盛岡で生まれた。若い頃からすぐれた英語教育を受け、札幌農学校時代の親友が内村鑑三であった。共にフランク博士の影響を受けキリスト者になった。アメリカのジヨン・ホプキンス大学に留学した。彼は後に「私は太平洋をつなぐ橋になる」と言い、国際連盟の理事にもなった人だが、外交と同時に内面的思索を深めた人で、西洋の学問だけでなく、日本人の心の基にある仏教、神道、儒教の造詣も深かった。アメリカの内省的教派フエーカーに共感し、自らもフエーカー教徒になった。欧米人に日本人の真髄を知らせるために米國で「武士道」Bushido (The Soul of Japan)を英文で書いた。日本語と英語を深く極めた文章で、日本人は、云々々るザルまねの洋式を倣うものでなく、キリスト教同様の人格、尊厳を尊ぶ民族であることを知らしめた本であった。ルーズベルトは、金子から渡された本を一晩で読み、「日本人を理解した」と言ったと云う。その上で日露戦争の仲裁役を買って出てくれたのである。それにより日本は勝った形で戦争を終らせることができた。司馬さんが言うように、それ以上戦争が続けば日本は敗けていたのである。そういう意味でアメリカの仲裁を引き出した金子堅太郎の功績は一級である。もう一人の一級は高橋是清であった。彼は戦費調達面で、米田や銀行のジェイコブ・シフと味方につけ、財政面の功績で一級であった。もしこの二人がいなければ、日本の勝利はなかったであろう。司馬さんが言うように、どんなにすぐれた組織でも40年経つとポンコツになってタマになると言う。金子が明治帝の記念碑を書いた頃には、明治帝のときに造られた組織はタマになりかけていた。この「明治天皇親漁記念碑」をその時代の重み^{ON}を背負って書けた人は、金子堅太郎をおいて他にいなかったのではあるまいかと、僕は思った。